



「新発田広域虹色フェスタ」。これでゴミが減るんだ！と驚き楽しみながらはがしてくれました。



これがうわさのリサイクル容器。食べて、はがして、リサイクル。



「古町どんどん」。ホテルイタリア軒のブースでも使われました。地域の大イベントへも着々と進出。

## INTERVIEW



「毎週木曜日日生協第一食堂で活動中！環境に熱い人、熱くない人も、大・歓・迎」  
左から、大橋香さん（法学部1年）、松本誠太さん（大学院自然研1年）、栗野諭さん（大学院自然研1年）

新潟大学生協

# リサイクル 弁当箱会

## 夢はイベントごみを総括して プロデュースすること！

この会はリサイクル容器の普及と回収率アップを目的に2000年10月に立ち上がりました。リサイクル容器って知ってます？リサイクル容器って食べ終わった後に表面のフィルムをはがすことによって、容器を洗わずにリサイクルできるすぐれものなんです。他大学でもこの容器は使われているのですが、他大学と比べると圧倒的に新大の回収率は高いんです。でも、単にリサイクル容器を普及させようというわけではなくて、これを使ってもらって環境問題について少しでも考えてもらいたい。やっぱり基本的には新大生に環境に対する意識を持ってもらうという活動をしていきたいですね。

これまでリサイクル容器を通してイベントごみを減らそうと、いくつかの県内イベントで実際に容器を使ってもらうなどの試みを行ってきました。なので今回のECO学園祭は特に思い入れが強いんです。これをモデルケースにして、他のイベントにも転用できないかなと考えています。

また、ECO学園祭と同時にコミュニティマーケットも開催しました。昨年3月に行われたコミマに私たちが唯一の学生団体として参加したとき、これをもっと他の学生にも知ってもらいたいと思ったんです。コミマを通して学生と社会人のつながりができればと考えました。実際にやってみて、災害ボランティアに関する熱い議論が交わされるなど出展者同士のつながりはうまくできたかなと思います。

今後は他大学とつながりを持って、それぞれECO学園祭のように煙まで面倒を見られるような学祭を広げていけたらいいなと考えています。これは夢ですが、イベントごみを総括してプロデュースできるリサ弁のNPOバージョンみたいなものを作れたらいいなとおぼろげながら考えています。

代表者：西淵智希（人文学部3年）  
E-mail: recycle\_lunchbox@hotmail.com  
<http://niji.coop.niigata-u.ac.jp>

新潟大学環境系サークル  
ひまわり

卒業生から物品を回収して  
4月にリユース市を行います。

「ひまわり」は2001年の9月に発足しました。僕が入会したのは2002年の4月。サークル勧誘していた代表の人に見せられた『環境について考えている人・大学で何か活動したい人を募集中』というビラがきっかけになりました。

一番印象に残っている活動は、現在もサークルの中で目玉として行っているリユース市です。僕が1年の12月に自分で企画したイベントで、仲間と一緒にリヤカーを引き、物品を集めたことが思い出に残っています。リユース市は開催が4月で物品回収が2月と3月です。卒業生に「モノをください」ということと、新入生と在校生には「買いにきてね」ということがポイントです。それと、ただ売るだけじゃなくて「今まで先輩が4年間使ってこれだけきれいにしてきたんだから、大事にして使ってください。」ということです。これがリユース市の目的なので大いにアピールしたいですね。

伝えたいことは、学生一人ひとりに環境を意識してほしいということです。例えば自分の箸を携帯したりゴミ捨ての曜日をきちんと守るということです。当たり前のことですが、今までできなかったことをちょっと気にかけてくれると、環境や地域が良くなってくんじゃないかな。そんな些細なことに気づいて、もうちょっと突っ込んで本でも読んでみようかなとか、イベントに参加してみようかなとか。さらに良くなってくれたらいいと思います。

代表者：鈴木昌俊（理学部3年）  
<http://www.geocities.co.jp/NatureLand/2212/>



週1回のミーティング。でも忙しくなるともっと集まります。



コミュニティマーケットでの  
ブース展示。来場者に「ひまわり」をアピール



新大祭でのゴミステーション  
管理。来場者の理解は年々ま  
してきてます！

## INTERVIEW



「これからは後輩に託して  
僕は隠居します」と語る  
鈴木昌俊さん（理学部3年）



サイゼリヤン発足時の様子。



毎回ドレスコードを決めて、楽しい会議にしています。

INTERVIEW



「今後も学園祭のエコ化を継続していきます」と語る  
村山貴規さん（農学部4年）

# サイゼリヤン

（新潟大学ECO学園祭事務局）

## チームエコのプロデューサーとの 出逢いがきっかけで結成しました。

サイゼリヤンを立ち上げたのは、NT21のチームエコプロデューサー（1）との出逢いがきっかけでした。プロデューサーと市民活動で共通の問題やこれからできることの話をしました。それで、環境活動をしている学生を集めて話をする事になり、2004年3月16日にレストラン「サイゼリヤ」に集まりました。

議論が白熱して、今回の新大祭でECO学園祭をやってみようということになり、サイゼリヤン発足につながりました。サイゼリヤンは、そのときに集まった「新潟大学リサイクル弁当箱会」と「環境系サークルひまわり」とプロデューサーと自分で構成されています。

合意形成が難しく、企画書を作成するのに時間がかかり、形になったのが6月でした。その後、新大祭実行委員会環境衛生担当の方にもメンバーに入ってもらい、常任委員会との橋渡し役になってもらいました。新大祭とECO学園祭は独立して実施し、常任委員会とは持ちつ持たれつの関係で行うことになりました。

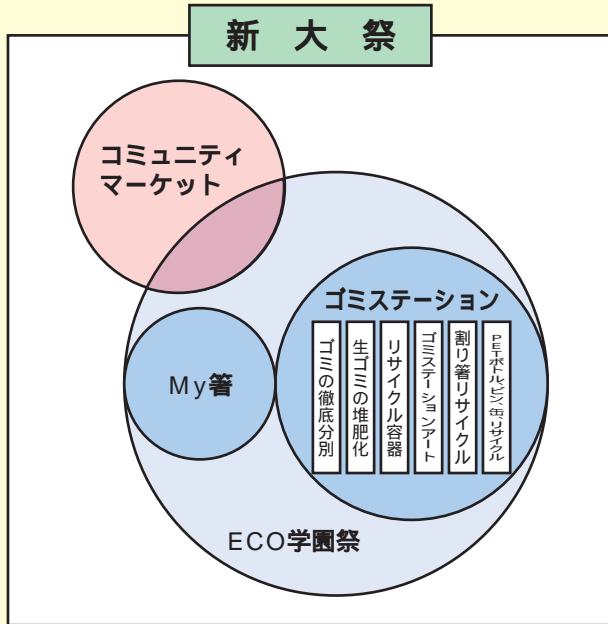
実際に働きかける対象は、学園祭の模擬店です。まず、模擬店の出店者にアンケート調査をしました。集計結果、エコ化することにほとんどが賛成でした。ですが、障害は、環境に特化するとコストがかかるので、それをどう解消していけばいいかということでした。

コミマには、準備段階から関わり、会議でボラバイト掲示板（2）を提案しました。もともと、大学内にあるバイト掲示板に併設してボランティア掲示板やボラバイト掲示板というのを設置したらいいんじゃないかと考えていました。バイトと同じ感覚で社会活動に関われるきっかけとして位置付ける、その実験をコミマでやってみるのも面白いと思いました。当日は、場所が目立たない所で、参加者が少なく、もっと、呼び込みの仕掛けをすればよかったかなという気がします。でも成果として出展団体間の交流が深まりました。

次回もまた学園祭のエコ化を継続してやりますが、その前に今回のECO学園祭の反省をやって、手順のマニュアル化を図りたいと考えています。あと今後は、環境に関する勉強会も重視していきたいですね。

1：NT21（新潟テレビ21）は2001年4月にTeam・Ecoを宣言し環境問題に取り組んできました。Team・Ecoは、エコロジーへの関心を高め、エコロジーの環を広げるため「今出来ること、身近な所から」をキーワードにスタートした環境キャンペーンです。NT21ホームページ <http://www.nt21.co.jp/index.html>より抜粋。  
2：ボラバイトとはボランティアとアルバイトの中間的活動を表す造語です。お金が一番の目的ではなく、経験したことがない仕事を経験することや、地域の人たちとふれあうこと、学ぶことを目的として、人手を必要としているところに手伝いに行くことです。

代表者：村山貴規（農学部4年）  
E-mail：saizeriyan@yahoo.co.jp  
<http://groups.yahoo.co.jp/groups/saizeriyan/>



## 第1回 新潟大学ECO学園祭

環境にやさしい学園祭の実現を目指し、学園祭で出るゴミの減量化、再資源化を推進する企画です。単にゴミを分別するだけでなく、最終処分されて煙になるまで面倒を見るという視点もっています。

- リサイクル容器の使用
- ゴミステーションの管理
- My箸キャンペーン
- 生ゴミの堆肥化

今までの活動の集大成としてECO学園祭を位置づけてみました。これをモデル化して他のイベントや学園祭にも転用できるように考えています。今後は県内のECO学園祭ネットワークづくりを推進していきたいと思っています。

### 今までの活動風景



3団体関係図



ゴミの分別処理。  
多くの方々に協力していただきました。



資源ゴミ回収業者への視察の様子。



回収した資源ゴミの計量をしています。



コミュニティマーケットで国ボラのブースを飾ったPRポスター。

## 新潟大学 国際ボランティア サークル

毎月3回ゼロのつく日に  
留学生との交流会を行っています。

私たちの活動の柱は国際交流と国際支援です。まず国際交流で力を入れているのは留学生との交流。例えば毎月3回0（ゼロ）のつく日に行っているコーヒーアワーや、日本語教室があります。卒業生や地域の人から集めた家具や電化製品などを新しく来た留学生に安価で提供するウエルカムバザーも毎年春に1回行っています。

国際支援ではラオスの子どもや人々との交流や、現地のNGOの活動の見学をメインにしています。スタディツアーは行ける人が限られているし、お金も時間もかかるということもあっていかにコンスタントにやっていくかというのが課題ですね。

今回の新大祭では私たちもコミュニティマーケットに参加しました。いろんな団体の方がそれぞれの活動に対して熱い思いを持っていることが伝わってきて「ああ、すごいな」と素直に思いました。国ボラのメンバーが他の団体のブースで熱心に話を聞いている姿を見て、参加してよかったなと思いました。

私は本当に一人ひとりが楽しくやりがいを持って活動ができればいいなと思っています。新鮮な空気をどんどん入れて、止まらずに進んでいけたらいいなど。留学生の需要に対して私たちがちゃんとしたことができていくかというのも今後の課題です。留学生への広報もちゃんとできればいいなと思っています。まず、コーヒーアワーでも何でもいいので気軽に参加してみてください。

代表者：芳賀理江（理学部2年）  
E-mail：nukokubora@hotmail.com  
<http://www.geocities.jp/nukokubora/>



毎週水曜日の定例ミーティング後の  
憩いのひと時。

### INTERVIEW



「一人ひとりが楽しくやりがいを持って活動ができればいいなと思っています」と語る前代表の吉岡真貴子さん（法学部3年）



世界中からアスリート（選手）が集まります。規模としては普通のオリンピックとたいして変わりません。

# スペシャル オリンピックス

## 2005年2月の世界大会に向け 週末は事務局でボランティアです。

スペシャルオリンピックス（以下SO）とは、知的障害者にスポーツを通じて自立と社会参加を支援する組織です。

SOに関わるようになったのは、ドイツに語学留学に行った時に訪れた国際平和村の子どもたちを見て衝撃を受けたことがきっかけでした。そこでは戦争によって体に傷を受け、心にも大きな傷を持った子どもたちが治療を受けていました。その子どもたちの笑顔を見た時、日本人の子どもと何が違うのだろう？と思いました。その時、平和って何だろう、もっと考えなくてはと思いました。

日本に帰ってきて学部の掲示板に「スペシャルオリンピックス語学ボランティア募集」とありました。それでボランティアの申込みをしました。

毎週金曜日に「ほがらか園」という知的障害者の作業施設にボランティアに行っていて、そこがSOの事務局になっています。「ほがらか園」の活動をメインにしていますが、SOの週末ボランティアも楽しくやっています。そこでは、ポウリングとバスケットをやっています。

今後の抱負としては、多くの人にSOを知ってもらって、彼らと接することによって何かを見つけてほしいということです。いい人間性というか、さらにいい生き方が見つかるように思います。

そして今、SOでは、ボランティアを募集しています。緊張せずに来て下さい。みんな笑顔で迎えてくれます。HP（<http://www.sonniigata.com>）もありますので、1度申込んでみて下さい。

代表者：波多野創（理学部3年）



一食の中で当日ブースを借りてもらって広報活動をしました。

### INTERVIEW



「多くの人にボランティアに来てもらいたいです。1度でいいので是非来てみて下さい！」と語る波多野創さん（理学部3年）

スペシャルオリンピックスは、知的発達障害のある人たちに、日常的なスポーツトレーニングと、その成果の発表の場である競技会を、年間を通じて提供し、社会参加を応援する国際的なスポーツ組織。日本では1980年に導入され、1994年には国内本部「スペシャルオリンピックス日本」が、スペシャルオリンピックス国際本部の認証を受けて発足。2001年5月にはNPO法人の認証を受けた。

コミュニティマーケット会場の横で、  
無農薬の野菜等を販売している  
「まめっこ」というサークルを見つけました。



夏休みに松代町で合宿。収穫した枝豆で夜は飲み会。



新大祭では縁農村の農家さんの  
野菜やおにぎりを販売しました。



主婦や学生にも大人気でした。

### INTERVIEW



「今後の活動を話し合う時はみんなマジメです」  
片野奈緒美さん(農学部3年) 吉田英二さん(大学院自然研M2年)  
上野聡子さん(大学院自然研M2年) 坂倉啓介さん(農学部2年)  
宮内あゆみさん(農学部2年)

# まめっこ

地域に出かけていき、  
農や食について学んでいます。

まめっこを上げたのは、縁農村という生産者と消費者が交流しながら農と食を考えている市民団体に学生が関わり始めたことがきっかけでした。学生で縁農村の活動に関わる人が増えていき、サークルをつくり、学生の視点で活動をしてみようとなりました。

サークルの理念は、大学からとびだし、地域に出かけていって、いろいろな人と出会い、いい影響を受け、農や食について考えを深めていくことです。地域の方々の考えを聞いたり、姿を見たり、いろんなものに触れたりする中で、深い学びも得られるし、自分の考え方や生き方というのを見つけられると感じています。

現在は、まだ立上げて一年も経たないので、農学部の学生がほとんどですが、農と食は切れないものなので、他の学部の人にも体験してもらって考えるきっかけになればいいです。

活動の一つとして、6月に縁農村の農家、小柳さんのトマトを新大の学生食堂で販売しました。普通より甘いトマトで、5日間各食堂で売りました。けっこう人気だったみたいで、毎日買ってくれる学生もいました。当初は学生食堂で無農薬野菜を使った料理はできないかと考えていたのですが、今のところは進んでいません。

今後は、勉強会を開き、サークル内で農や食について深めるとともに、他の学生がもっと食や農に対して興味をもてるようなきっかけづくりもしていきたいです。また、大学の授業で農家と学生・教授との交流や情報交換ができればいいなと考えています。農家と大学の交流が生まれ、学生たちがもっと農業に興味をもってくれればいいですね。

代表者：片野奈緒美(農学部3年)

# 震災ボランティア 新大本部

ボランティア活動を希望する学生の  
相談にのっています。

震災ボランティア新大本部は、学生が被災地の方々の力になれないかということで、7・13水害でボランティアをした人たちが集まって立ち上げようと話し合ったことがきっかけです。その後は、大学に理解、努力していただき学生生活支援課内（総合教育研究棟1階）に本部が立ち上がりました。

初めは、大学のいろんなところにスタッフ募集の張り紙をしました。現在スタッフとして活動している学生は103名います。

空いている時間に本部に来て、各地のボランティアセンターと連絡を取ったり、ボランティアに行きたいという学生の相談にのったり、交通手段のナビゲートをしたりしています。

最近は新しく学生にできるプロジェクトということで、ペンフレンド（1）、出張家庭教師、段ボールマイスター（2）をしています。あとチャリティコンサートやバザー、放課後の寺子屋などの企画も始まっています。

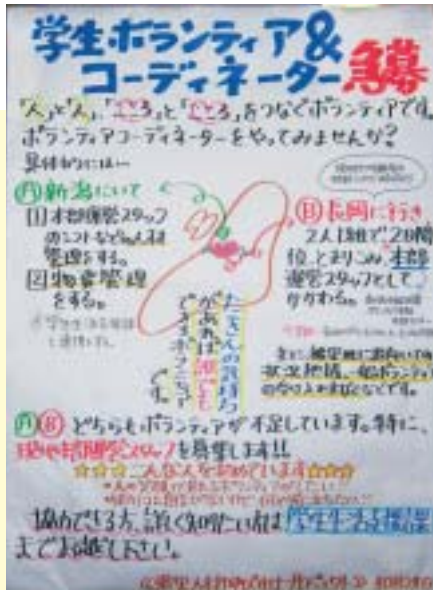
被災地の方々は、精神的な面でストレスがたまっているので、ボランティアセンターが閉まった後も心のケアをしていきたいです。実際できることは限られていますが、少しでも心のケアになればいいなと様々な企画を進めています。長期的な支援は、時間に余裕のある学生の見せ場かなと思っています。

また、コミュニティマーケットを機に、国際情報大学のn-VIC新潟ボランティア情報センターの学生ともつながりができ、新大のリサイクル弁当箱会や国際ボランティアサークルの人たちにも加わってもらい、ミーティングをしています。その中で、n-VIC新潟ボランティア情報センターが主体になって開催するチャリティコンサートを、支援していくという動きもあります。

今後は、ニュースなどの報道も少なくなり、ボランティアの熱も下がると思うので、中越地震のことを忘れさせない息の長い活動をしていきたいです。

TEL : 080-3320-6658  
E-mail : gakuserv@adm.niigata-u.ac.jp

- 1 登録してくれた、主にお年寄りや子どもたちと、手紙を交換する活動。メンタルケアの1つとして位置付けている。
- 2 強化段ボールを使って家具を製作し、避難所や仮設住宅で役立ててもらおうという活動。家具を作るという目的以外にも子どもたちの遊びの1つとしても考え、実施している。



手づくりの募集ポスター。

ダンボールで作った机、引き出し、おもちゃ...などなど。



「自分たちに何ができるか？」を話し合っている風景。

## INTERVIEW

震災ボランティア新大本部受付でインタビュー。お話ししてくれたのは、服部祥平さん（理学部4年）、浦山亜希人さん（人文学部4年）、南雲郁美さん（教育人間科学部3年）







西地区公民館に掲示してある、まなび屋の活動紹介です。



まなびの時間の様子。この日は、「職業について」学びました。

### INTERVIEW



「もっといろんなところに出て行って活動の幅を広げていきたいです」と語る水上雄太さん（教育人間科学部2年）

## 地域教育実践研究事業

# まなび屋

学校では学ぶことのできない「まなび」を子どもたちに提供しています。

「まなび屋」は公民館にくる子どもたちに学校以外で学べることを教えてあげられたらいいね、という思いから始まりました。最初は参加する子どもたちは3～4人くらいで、スタッフも多くはなかったです。スタッフの多くは教育人間科学部ですが、農学部や医学部のスタッフも何人かいます。活動を続けているうちに、公民館の方とのつながりや地域の方とのふれあいが生まれてきました。

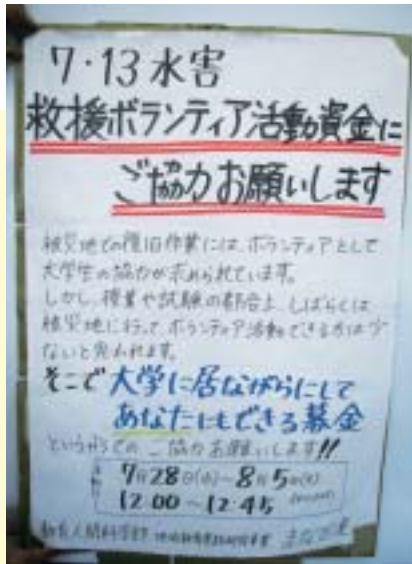
活動はまなびの時間という内容と、毎週木曜日にゲームをしてふれあうフリータイムとで構成されています。まなびの時間では、学生スタッフや地域の方々を講師として、普段学校では学ぶことのないような「まなび」を子どもたちに提供するといった内容になっています。

毎年、4～5月に、球根栽培の為につんだチューリップの花をボードにさして絵を作り、それを飾る「花絵」というイベントを行っています。ただ子どもたちと一緒にやっているだけでなく、外部からの見学者と交流をもって、そこからつながりが生まれて、スタッフ自身が外へ出ていききっかけにもなっています。

コミマは「まなび屋」をアピールする大切な機会でした。いろいろな団体の方と知り合いになって自分たちの活動に生かすきっかけにもなりました。

組織が大きくなって同じ活動を続けていると、どうしても新しいことに挑戦しなくなります。今までの公民館でやっていたことだけにとらわれないで、もっといろんなところに出て行って多くの活動に携わっていければいいと思っています。

代表者：水上雄太（教育人間科学部2年）  
西地区公民館（活動場所）  
TEL：025-261-0031  
E-mail：nishi.co@city.niigata.lg.jp



炎天下、この看板を掲げて呼びかけました。総額161,342円。ご協力ありがとうございました。

ジャンケン箇所やぶり。お兄さんに勝てるかな。このほかいろんなゲームをしました。



久しぶりのプール。とっても気持ちよさそう！子どもたちははじける笑顔が見られました。

## INTERVIEW



「情報をたくさん持っている人とつながりがあったから一歩を踏み出せました」と語る大滝優果さん（教育人間科学部3年）

## 7・13水害における まなび屋の活動

### 募金活動と三条の小学校への出張まなび屋でした。

7・13水害の際、まなび屋が活動したことは、主に募金活動と三条での出張まなび屋です。

募金活動は、現地ボランティアに行き、ショックを受けたことがきっかけでした。大学に戻ってから、ここで講義を聞いている場合じゃないともどかしさを感じ、現地に行かなくてもできる募金を大学全体に呼びかけることにしました。

並行して、まなび屋で募金活動をしてくれる人を呼びかけたら、大賛成、協力するよと言ってくれたので、うれしかったです。まなび屋のみんなの力を借りて、実行に移せました。募金活動をしていると、そのまま素通りする人もいれば、「ご苦労様、熱中症で倒れないでね。」と声をかけてくれる人もいました。

もう一つの活動は、出張まなび屋です。水害後、遊んでいる子どもの姿が見えないことに気づき、被災地の子どもの居場所づくりをしようと一人のスタッフが声をあげました。

唯一、三条市立月岡小学校が体育館もプールも被害がないということで、校長先生にお願いしました。校長先生をはじめとして、先生方が協力してくださり、水中運動会と体育館での遊びが3回できました。子どもたちは、毎回100人近く集まってきて、久しぶりに友達とプールに入れてとても楽しそうでした。

終了後、スタッフの中で、3回で終わらせるのではなく、冬休みや春休みもやりたいという話がありました。まだ実現していませんが、いつかできたらいいなという夢はあります。

7・13水害のとき、私は、情報をたくさん持っている人とつながりがあったから一歩を踏み出せました。中越地震が起き、大学の中に相談する所があったら、そこから情報を提供して、他の学生も大きな一歩を踏み出せるんじゃないかと考え、震災ボランティア新大本部の立ち上げに関わりました。震災ボランティア新大本部が学生による学生のための相談窓口として、うまく機能していけたらいいですね。